

石井っ子だより

平成28年12月16日発行

12月号特集

発行責任者 紺野 宗作

家読カード・・・いつも感動して読んでいます！

「家読」・・・構えなくて大丈夫です！楽しみましょう。

一言に「家読」といってもやり方は様々です。料理の本と一緒に読んで作るのも立派な家読です。皆さんの家庭のスタイルにあわせた本の楽しみ方を見つけましょう。

① まずは、大人が楽しむことから！

自分が楽しくないことを子どもに押しつけるような形になってしまうと、子どもは理不尽に思います。子どもに「本を読みなさい」ではなく「子どもと一緒に本を楽しもう」の気持ちが大事。楽しい空間と時間を「共有」してみましょう。

② 感想を無理に聞かないで！

子どもに感想を聞くと「おもしろかった」など模範的な回答をしてしまい、そのお話の本当の余韻に浸れないことがあります。感想を書くことに抵抗のある子どももいます。また、感想に正解はありません。自然に子どもから「この場面がこうだった」と話してくれるのを待ちましょう。

3年生では、1冊の絵本を7人～8人のグループでリレーしながら家読をしています。



「かぜのでんわ」という絵本は、岩手県大槌町で東日本大震災後に山の上に置かれた電話ボックスをモデルにした本です。家族とのふれあいの中で、人の命（いのち）とは何かを考えることは、とても意義深いものがあると思います。

（子ども）

「かぜのでんわ」を家族で読みました。ちょっと悲しいお話でしたが、みんなのおもしろい話がとどいたのでよかったです。わたしは、家読が大好きになりました。つぎもやりたいです。

（保護者）

大好きないもとようこさんの絵本。いつもは笑顔で家読をすることが多いですが、この本は会えなくなった人への想いを伝える電話の話で実際に岩手県にある「風の電話」をもとに作られた本だと知り、少し悲しい気持ちになりましたが、本のように「想いが届いているといいね。」と話しながら真剣に読みました。最近では家読をする時間も増え、楽しみにしています。これからも家読をたくさんして家族の時間を大切にしたいです。

ノーメディアチャレンジ週間の家読(うちどく)カードから

本の名前「てぶくろ」

(子ども 3年 6年)

小さな男の子の手に大きなクマが入るわけがないとみんなで笑っておもしろかったです。本はあり得ないことも入っているのだなと思いました。

(母)

6年生の兄が家読をいやがると思いましたが、はずかしがっても参加してくれてうれしかったです。1冊の本をみんなで読むことで、より一層深く内容を感じることができました。



6年生には少し幼稚だと思われる絵本でも家族と一緒に読むことにより家族の会話がはずみます。たった1冊の絵本で家族が楽しくなる家読は最高です。

子どもにすすめられた絵本で家読を行い、お母さん自身も、もっと他の絵本も読んでみたいと感じる。なんと素敵な家読なんでしょう。



本の名前「やまびと」

(母) (子ども 4年)

この本を進めてくれたのは子どもです。「どうして?」と聞くと「なんかいい。」と。読んでみると、「なぜ? どうして? 何を伝えたいの?」と、「なんで、なんで?」という気持ちでいっぱいになりました。そして、絵にもひきつけられます。この本は「遠野物語」の一部でした。他の話も読みたくなりました。シリーズで探してみて、また、子どもとはるか昔の世界の絵に入り込んでみたいと思いました。絵がとっても素敵です。(以上抜粋)

本の名前「いのちをつなぐ」

(母) (子ども 2年)

東日本大震災で被災し被爆し、飼い主に捨てられ、殺処分寸前という過酷な現実から救出された福島の被災犬14頭がセラピードッグを目指します。その命のリレーと再出発の記録です。

今、この本を読んで、人間だって心細かったし、恐ろしく、怖くてたまらなかったあの時、犬たちも同じ思いでいたのだと思うと胸が苦しくなります。そのような中で、(作者の) 大木トオルさんのような方々が命をつないでくれていることに感謝の気持ちでいっぱいです。



「生きることをあきらめてはいけないこと。どんな命でも愛してくれるだれかがいること。」を親子一緒に感じ、涙した様子が浮かびます。家読って素晴らしい。